

りて柔かい枯草の中へ畫架を立て、自分は三脚なして稻叢へ
 靠れ懸かりながら前に有る稻叢の二ツ三ツと、中景の農家と、
 其の後の霞んだ山を小さひ畫面に入れて寫生しかかると、近く
 て風あげに餘念なかつた小供等が五六人、風を下ろして直ぐ寄
 つてくる、「やあ寫真を描い居らあ」と一人が言へば、「あら一チ
 ヤン處、の家を描いて居るよ」と彼の農家を指さして云ふ、傍
 を通る人が皆立止つて見て行く、西の空が少し黄ばんで彼の家
 も少し霞できた頃、夕ツチを入れ終つてパレットを洗うて居る
 と、田の向から友が一人、三脚をふり廻わしながら「やつてる
 のかれ」と聲を懸ける、「最う仕舞かれ」と、すぐ畫架のそばへ寄
 つてきて畫面と向ふを見くらべて、「一寸此處も善い處だれ、僕
 はそら彼處の森を描いたよ」と、今描いた家の左手の森を指さし
 ながら、スケツチ箱を開けて見せる、豆腐屋がりんをならして
 わきの道を通つて行く、「君最う歸へらうじやないか」と、友
 をうながして畫架をたゝむと、彼の家からポト白く夕煙が上
 った。

日本水彩畫會新會友

福岡縣三池郡渡瀬
 新瀉縣三島郡出雲崎町
 栃木縣日光町鉢石町
 福岡縣鞍手郡木屋瀬町
 大阪市東區農人町二ノ七十五

山口 山 高橋 浦次 郎 猛
 星野 長一
 立石 録太 郎
 大隅 直造

御わび

十二月の末に、年賀状は一括して特別扱に托し、伊豆に旅行し
 て歸つて來たのは一月の七日、翌朝、諸君からよせられた澤山
 の賀状を拜見してゆくうちに、まだこちらから差上ない分を區
 別して見たら、實に四五寸の高さに達した、確に三四百枚はあ
 りませう、その中には叮嚀な繪の畫いてあるのも少なくはない、
 そしてその多くは未見の方であつて、多分本誌の愛讀者諸君と
 推察し、御厚意を深く感謝しました、それで、宿所の分つてお
 る方へは、早速に答禮を申上るつもりでゐたところ、留守中の
 雑務はある、來客はある、新年會だ、送別會だ、晚餐會だ、何
 の角のと事繁く、一日々々と延引してゐるうちに、最早本誌二
 月號の編輯の時が來てしまいました、正月も半なかばを過ぎた今日、
 年始状であるまいと（實はあまり澤山で手のつけられぬので）、
 今年に此誌上で御わびを申上て置いて、諸君に失禮いたす事にし
 ました、あしからず御許容を願ひます、諸君の賜はりし御賀状
 は、永く保存して、御厚意はいつ迄も忘れませむ。

四十三年一月

大下藤次郎 敬白